令和8年1月９日(金)

魚沼きこえの教室だより

令和7年度　第9号

長岡聾学校小出分教室（小出特別支援学校内）
きこえの教室　担当：小池　豊
〒946－0035　魚沼市十日町 1738-2
TEL:025-792-5462　fax:025-792-5465
Email:koike.yutaka@nein.ed.jp

地域の小学校や中学校で学んでいる難聴児童生徒への理解と支援、いつもありがとうございます。きこえの教室では、聴力を測定したり、耳や音に関して学んだり、難聴や補聴について学習するなど、右のような自立活動にかかわる様々な内容があります。今回は、その中から「アドボカシー」という学習の様子をご紹介します。

子どもたちの声を形にする＝アドボカシー

最近、少しずつ「アドボカシー」という言葉を耳にするようになりましたが、まだまだ一般的とは言えません。『聴覚障害児のためのセルフアドボカシー』によれば、セルフアドボカシーとは「障害者が自らの必要な支援を主張し、適切な配慮を得るためのスキル」と説明されています。つまり、障害を含め自分自身をよく理解し、必要な支援を相手に分かりやすく伝え、根気よく話し合っていく力が求められているのです。したがって、合理的配慮を受けるためには、このスキルが必要不可欠と言えます。とは言え、そうした力は、一朝一夕に身に付くものではありません。根気よく対話を重ね、次のような他愛のないおしゃべりの中から糸口が見つかることがあります。

例1　音読の声が聞こえない

教師　「友だちとは仲直りしたみたいだね。良かったね。他に困っていることない？」
児童　「音読でどこを読んでいるか分からない時がある。だから、緊張しちゃう…」
教師　「どんな時に聞こえにくいの？」
児童　「小さい声の子とか、後ろの席とか…」

例2　ロジャー(マイク)の使い方

児童　「ロジャーが裏返ると、雑音が入っちゃう」
先生　「服がこすれる音でしょ。他にもある？」
児童　「ロジャーを肩に掛けたり、スマホみたいに持って話したりする子も多い…」
教師　「なるほど。どんな時どんな聞こえになるか整理をして、みんなに伝えてみようか」

アドボカシーの学習は、まずは❶**「聞こえにくい」とか「困っている」という自分の思いに気付く**ことから始まります。意外に思われるかもしれませんが、学校の中で難聴は自分だけという環境の中では、子どもたちは「困っていない」と答えがちだからです。次に❷**周囲の友だちや先生などに、どう伝えるかというステップ**になります。しかし、自分の感じ方と周囲の考えは、必ずしも同じとは限りません。むしろ違うことがほとんどです。上の例でいえば、小声の子は恥ずかしいけれど精一杯の声で音読しているのかもしれませんし、ロジャーについては、教師だけでなく児童の発言にも積極的に使用しているクラスだからこそ生じる困り感だからです。この温度差を丁寧に埋めていくことが学習の核と言えます。いつどのように困っているのかを整理し、解決策を一緒に考え、誰にどのように伝えるのかを確認することで、子どもたちの声を具体的な形にしていきます。一方的に要求するスタンスではなく、相手の気持ちを想像することも大切ですし、少しずつ良い方向に変化していくに違いないという気長な構えも必要です。つまり、❸**理解を求め丁寧に話し合い続ける**姿勢が求められるのです。そんな子どもたちの声にぜひ耳を傾けていただければと思います。